

随分とまあファンタジーな世界じゃないか(仮)

倒錯した愛

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

作者の書いている駄作小説の主人公であるアノヒトに、今回は趣向を変えてファンタジーな世界に転生してもらいました。

生まれた頃からハードモード(?)な人生に翻弄される(はずの)主人公をご覧ください。

目次

第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
57	52	47	34	26	20	17	12	7	1

第1話

——なんだ、ここは？この、世界は？

死後に白い神から新しく構築したばかりの世界への転生を勧められたと思えば、いきなり薄暗い廃墟のような場所とは。

明かりはロウソクのみ、窓のない岩をくり抜いた穴から空が見える、いまは夜の様だが……。

というか視線が90度傾いている気がする………気がする、ではなく実際に寝転がっているからか、つまり私は産まれたと言うことか。

「それでは、測定いたします」

「うむ」

なにやらヒョロくて顔色の悪い男が私に両の手をかざしだしたぞ？測定とはなんなんだ？

「魔王様！大変です！」

「なんだ？」

ヒョロくて顔色の悪い男がハツとした様に振り向く、なんとか首を動かすと、そこには大男がいた。

「魔王様の御子息には、魔力が………」

魔王に魔力？ずいぶんとファンタジーな世界に転生させられたよ
うだ。

「ない、と……そう申すか」

「はっ！残念ながら………」

あっちのツノの生えた大男が私の父親らしき『魔王』というやつか、母親が気になるところだが、私の出自はファンタジー世界で言う所の魔族とやらで確定か。

「魔王様の跡取りがこれでは………」

「案ずるな、我にはこやつを抜いて3人も子がおる」

「長女上様に次女上様、長兄様でございますか」

2人の姉と1人の兄がいるのか、それに跡取りときたか。

勇者が魔王を倒してハッピーエンド、数十年後に別の魔王が復活

……というのがベタなシナリオだが、なるほど、生前に退位することもあるわけか。

「さよう、彼奴等の魔力は余譲り、魔界も安泰であろう」

前世では散々暴れて、平穏な余生を過ごし、テストケースとして転生したら、暴れていた頃のような人外になって産まれ落ちるとは。

もしや、白い神の皮肉ではないのか？とも思ったが、もしそうだとしたら茶目っ気が出過ぎててあいっらしくもないだろう。

「違いありませんな、この子供はいがかいたしましょう？」

「いらん」

どうやらこの世界では魔力がなければ生き残れない様だ、となると、私以外の魔王の子は皆優秀な魔力を持っているということか。

「では、あの女の元に置いてきましょう」

「好きにせよ」

「はっ！」

どうやら私は用済みのようで、これから産みの親の元に返されるようだ。

こういう場合の母親というのは、階級やヒエラルキーが低い位置にある者だったりするが、その通りだった。

ヒョロくて顔色の悪い男、改め青肌の男に連れていかれた場所は、魔界と呼ばれる魔族が住む領土の端の方、中心に魔王のいる通称魔王城からはかなりの距離があった。

ついた所は小さな町、そのボロい一軒家、その入り口に私を置く、と、ヒョロイ青肌の男は去っていった。

しばらくして、ドアが開くと女が出てきた、女は寂しげな、この世の全てを諦めたような表情をしていた。

女が置かれた私を見た途端、驚いた表情を見せ、パアツと笑顔が咲き、涙を流しながら私を掬い上げて抱きしめた。

「グスタフ！ああ！グスタフ！無事だったのね！よかった！本当によかった……」

今世での私の名前はグスタフか、前世では『神の助け』を意味する名前だったか、白い神め、茶目っ気でも出してきたのか？

そこからは色々あった、衝撃的だったのは母親がサキュバスであったことだろう、年齢も100はゆうに超えているようだ。

どうやら私は、ファンタジーな世界で魔王とサキュバスの間に生まれた、魔力の無いインキュバスのようだ。

魔力がないのは別に気にしてはいない、私には引き継いだ身体能力があるからな。

まあ欠点として、身体能力を引き継ぐと低身長になる呪いを受けるみたいだが………そうなると名前とのギャップが………まあいいか。

それで、この端にある町なんだが、どうも魔界の端というだけではなく、人間界に最も近い町のようなのだ。

当たり前だろ、と思うかもしれないが、他にも人間界に近い町はあるらしい、こういう町に住むのは大抵が中級以下の魔族、衰退した上級魔族が大半を占める。

母親は衰退したサキュバスの末裔だ、数百年前、人間界からの大攻勢に吞まれて散り散りに、各個撃破される形で数を少なくしてしまつたようだ。

数少ない生き残りの母親は、地位向上と子孫繁栄を考え魔王との間に子を授かった、それが私だ。

産まれたら政治道具として使う考えだったらしいが、産んだ直後顔をまともに見る機会もなく連れていかれ、子を持つ母親としての責任を強く意識したらしく、利用したりしないことを誓ったそうだ。

という話をしてくれたのが15歳頃の時、今では私も立派な22歳のニートだ。

これは別段おかしい話ではない、20歳になる頃に予備役扱いで魔王軍に強制編入され、60歳までそれが続く、軍規等が書かれた冊子が届くのみ、有事の際は即時出動、訓練等はなし、しかしその間給料は出るため、ほとんどの魔族はニートをしながら軍属となっている。

訓練がないといったが、魔族に連携など存在しないため、共同作戦など考えられず、したがって訓練などしようものなら怪我人死人続出で軍力が小さくなってしまふからだ。

給料のほどは中々に良い、ただ、当たり前だが社会福祉など無いファンタジー世界、手取りは多いがそれだけだ。

階級もありそれに応じ給料も増える、今はただの一般兵だが、人間との戦闘で戦果をあげ、兵士長クラスまで上がれば一月1000枚の銅貨が200枚の銀貨になる、銅貨10枚で銀貨1枚、兵士長クラスになると給料はほぼ倍確定ということだ。

まあ、そもそも戦争がない現状ではこんな話などなんの意味もないんだが、実行できるなら今頃將軍にでもなっている頃だ。

だからニートやっつてることだ、だがニートというのも暇だ、食っちゃ寝、食っちゃ寝ばかりでは飽きる、刺激が足りない。

「ねえ、グスタフ?」

「なにかな? 母さん」

「その………ちよつと、お母さんと買い物に付き合つて欲しいんだけど、良い?」

「わかった、準備するから待つて」

ニートの利点の一つとして、家事の手伝いができることは幸いな。

外出用の服を着て母親の元へ行く。

「それじゃあ行きましょ」

「そうだね」

母親と市に向けて歩く、道行く魔族が母を見る、押さえつけてはいるが、サキユバス特有のフェロモンは少しだけ漏れてしまうもの、人目を引くのは仕方のないことだ。

母親はサキユバスの中でも優秀なほうで、全力にしたフェロモンを垂れ流せば小さな村の機能を全て停止させられるほどの強さを持っている。

フェロモンに当てられては、人間も、魔族も、皆母を求める、母の年齢に見合わぬその妖艶な肢体を求める亡者と化す。

しかし本人はそれが好きではないらしく、こうして人目を引いてしまい、何かの拍子に襲われかねない時のみ私をボディガードとしてこうして同行させている。

私を利用しないと誓った母は、私を同行させるたびに苦しんでいるが、私が好きでついて行きたいから、と言ってから少しは軽くなったようだ。

ん？フェロモンの発生源のすぐ隣を歩いてて平気なのかって？危険に決まっているではないか。

サキュバスもインキュバスも、他の人間や魔族と同様にフェロモンには太刀打ち出来ない。

ただし、自制することはできる、母がフェロモンを押さえつけているるように、私も母のフェロモンを知覚できないようにしているからだ。

これをしておかないと、市のだ真ん中でマザーファッカーになってしまうからな。

ああそうそう、私もインキュバスの端くれ、とりわけて母はサキュバスとして優秀で父親も一応魔王であるため、インキュバスとしては非常に優秀なのだとか。

そのためフェロモンも母親に比べて効果が高く、範囲も広い、そのぶん自制するのは辛い、コツを早めに掴めて助かった。

フェロモンが出始めるのは18歳頃からと言われ、これはサキュバス、インキュバスを問わず同じらしい。

しかし、本当にコツを早めに掴めてよかった、18歳になってしばらくしてからフェロモンが出始めたんだが、その夜にまさか母親に夜這いをかけられるとは思わなかった。

危うくトラウマになりそうなところで自製のコントロールができるようになったため事なきを得たが、母が恥ずかしがって3週間くらい素っ気なくなかったときは少し悲しかったな。

「今日は何にするの？」

「昨日のシチューの残りを使って、ドリアを作ろうと思ってるわ」

「いいね、野菜は多め？」

「安かったら多めにするわね」

先程から歳の割に私が子供扱いされているが、魔族で大人と言われるのは150歳を超える頃になってから、母はひやくはちj……………。

「グスタフー、お饅頭食べる？」

「いいの？家計苦しくない？」

「あなたの給料のおかげでだいぶ助かってるから、それに、ちよつとくらい贅沢しないダメよ？あなたのお金なんだから」

「じゃあ、一つ貰おうかな」

たかが1000枚銅貨、されど1000枚銅貨、私は7割を母に渡している、他の魔族は自分でほとんどを使うそうだが、私はそこまで趣味があるわけでもなし、無駄遣いを避けるためにこうしている。

「へいよ！奥さん今日も美人だねえ！」

「あら、ありがとう………はい、グスタフ」

「ありがとう母さん、あちちっ」

お饅頭と言われているこの食い物、中身は動物の肉を包んである肉まんである。

肉についてはその日によって様々、単純な豚やイノシシからキメラにまで及ぶ、一番人気はドラゴンの肉を使った饅頭、滅多に並ばないが、脂のノリが最高らしい。

今日は普通のイノシシ肉のようだ、味に関しては豚に比べ硬い以外は普通だった。

それからは母のボディガードを努めつつ、買い物完了、帰路についた。

第2話

私の趣味を紹介しよう。

知っての通り、金はほとんどを母に献上しているため、月毎に手に入る銅貨1000枚のうち300枚が私の給料となる。

300枚あれば、一ヶ月を乗り切るには困らない程度の金、ただし、少しの贅沢も許されないが。

そんな銅貨300枚で私が何の趣味を見つけたかというと、意外にも『鍛冶』であった。

専用の道具は持つておらずとも、廃材で十分なものができる、金属を鍛えるための火の燃料は森から切ってくれば良い、材料もまたしかり、良質な金属が欲しいと言うなら銅貨を使えって買えばいい。

母に許可をもらい、そこそこの広さの家の一角に廃材でリサイクルされた工房をこしらえた。

近くの鍛冶屋で小さくて合金にするには物足りない量の廃棄予定だった金属を数十枚の銅貨で買い取って工房に持ち帰り、炉に火をつけた。

こういう時に魔法が使えれば楽だったろう、私は使えないから火打石でつけた。

燃料をくべて温度を上げ、熱を帯びて真っ赤になった炉に数種類の金属を投げ込み、溶かしていく。

溶かしている間、なぜ鍛冶を趣味として選んだかを話そう。

この世界では前世では見たこともない性質の金属が多く、興味が湧いて鍛冶屋で話を聞きたびにのめり込んでいった。

2年ほど貯め続けた銅貨数千枚もあることだ、と、軽い気持ちで始めてみたわけだ。

趣味でやるわけだが、才能はあるため、あとは全力を出して最高の品を創り上げるのみだ。

今回は軽くて丈夫な合金を作り、それを使って短剣を仕上げてみようと思う。

短剣ならば母の護身用にちょうど良いことだろう、誕生日も近いし

それに合わせて贈ることにしよう。

つとと、完全に液体になったな、これを、砂型に流し込む。

砂型というのは、文字通り砂で作った型、木枠に砂を敷き詰め、押し固める、そしてもう一つ木枠を用意して、そこに作りたいものの木製のレプリカを置いて、砂を敷き詰めて押し固める。

レプリカを外して、レプリカのあった場所まで小さなトンネルを掘る、そしてら2つの木枠を合体させる、これで完成になる。

あとは、トンネルから合金を注いで、レプリカで作った空洞部分全体に行き渡るようにして、合金が冷めたら崩すだけ。

簡単だろう？ところが意外にも難しいんだ、砂の選定に時間がかかるし、レプリカもうまく作らなくてはいけない。

砂型に流し込んで数時間、触ってみると土はひんやりと冷たかった、崩してみるとレプリカそっくりの合金が出来上がっていた。

トンネル部の合金をそぎ落とし、短剣というにはいびつな合金棒を火の中に放り込み、赤くなってきたら取り出して鉄の槌で鍛える。

2日ほど打ち続けた合金棒を、今度は研いで刃をつけていく、どうせならと血溝も彫り、軽量化と耐久性の向上も測った。

頑丈だと有名な動物の皮を購入、鞆に加工し針で縫い付ける、なかなか良い感じだ。

出来上がった短剣の持ち手部分を木から削って創り上げる、握りやすいよう湾曲したデザインにした。

握った時に誤って怪我をしないよう、鰐は小さくも負担がかかりにくい形状のものにした、これも短剣同様に砂型で仕上げた、本来なら短剣に鰐は不要だが、母に贈る以上は安全性を考える必要がある。

持ち手の柄の部分に鮫皮に似た動物の皮を巻き、糸を巻いてしっかりと馴染ませる、数日そのままにし、馴染んできたら糸を解き、より太くて握り心地の良い糸を巻いていく。

これで、完成だ、ざっと2週間は使ったが、最初にしてはそこそこの出来映えだろう、鍛冶屋のおっさんに礼を言いたいところだが、短剣のことがバレるとサプライズプレゼントの意味がないから後にしよう。

母の誕生日の日、今日くらいは自分に料理を作らせてくれと頼み込み、母の好きな料理を作ってあげた、その後で母に短剣を見せると、思惑どうりに驚く顔が見れた、プレゼントだと言うとポカンとした顔をして、泣いて喜んでくれた。

言っておくが親孝行の良い息子を演じるつもりはないが、前世では親に散々悩まされた手前、今世での母が優しく見えるのだ、だからここまで手のこんだことをしたのかもしれない。

自分でも、自分がわからない、ただ、今の母に感謝したいという気持ちはまぎれもない本物だ。

いつも通り、やりたいことをやっつけていこう。

ど、どうすれば良いのかしら？嬉しいんだけど、いえとても嬉しいのよ？

私のかわいいかわいいグスタフが、お利口で、気が利いて、ハンサムで、優しいグスタフがくれた最高の誕生日会。

私を作るより明らかに美味しい料理には驚かされたわ、故郷の味のままにとても美味しい料理だったわ。

でも一番驚いたのは、趣味で始めた鍛冶で作った短剣よ。

最初に見せられた時、どこかで買ってきたものじゃないかって思った、でも違ったの、グスタフが自分で母親の私に作ってくれたものだったの！

私ったら、嬉しくって嬉しくって泣いちゃった、次の日から買い物に行くときは、もちろんグスタフも一緒だけど、短剣も隠して持ち歩

いているわ。

それでね、ふとした時にちよつと鑑定してみたのよ、グスタフの初めて——作った短剣、そしたらビックリ！この短剣すごいの！『お母さん専用の短剣』になつてたの！

『持ち主指定の効果付きのネームドの短剣』になつてたのよ？すごいでしょ!?!うちの子すごいでしょ？グスタフすごいわ！さすが私の子！天才だわ！

ふふつ、ちよつと興奮しちゃつたわ、ごめんなさいね？

それでね？それでね？短剣の名前が【我が愛しき母へ贈る】なのよ！鑑定してこれを知った時と言つたらもう！最高だつたわ!!お母さん嬉しいわ！イケメンすぎよグスタフ！もう私、グスタフと結婚したいくらいよ！

さつき言つた効果なんだけどね？なんとこの短剣、【我が愛しき母へ贈る】は、お母さん以外の人は決して抜けないし、握つて振つてもものを切れないのよ。

でもお母さんが握ると抜けるしものは切れる、それにステータスも向上するのよ！伝説にある『魔剣』と同じような効果があるつてすごいと思わない!?!すごいでしょー？羨ましいでしょー？でもダメー、グスタフちゃんは私の子なんですー、誰にもあげませんー。

ふふつ、ふふふふふつ。

「グスタフー」

「なあに？母さん」

「ううん、なんでもなーい」

「？、はーい」

かわいいわ…………グスタフ、私の愛しい子…………。

「そういえば、母さん、今日お昼から出かけるね」

「あら、どこに行くの？鍛冶屋さんのところ？」

「薬草屋のところ、手伝つたらお駄賃くれるらしいんだ」

「そう、気をつけて言つてらっしやいね」

「うん、晩御飯までには戻るから」

薬草屋さんかー、私もよく行つてたっけ、おじいさん元気かしら？

そういえば、お孫さんがいたんだっただかしら？今30くらいかしらね？——グスタフと同じくらいね。

危険かもしれないわ。

「……………グスタフ？」

「なあn……………どうした母さん？怖い顔して」

「葉草屋さんのところのお孫さんとは、付き合っていないわよね？」

「？、付き合っていないよ」

「そうよね！グスタフちゃんは恋も知らない純粋な男の子なんだからね！」

「本当？お母さん、グスタフに嘘つかれたら生きていけないわ」

「本当だよ、確かに綺麗な人だけど、僕にとってはお姉さんみたいな人だから」

「ニコツと微笑むグスタフちゃんかわいい！」

「そう、それならいいわ」

「うん、あつ、そろそろいい時間だし出るね」

「いってらっしゃい」

「ウウ、行かないでグスタフ……………寂しいよー。」

第3話

私の友人を話しをしよう。

私と母の住む町から少し外れたところにある小さな村、その薬草屋の店主のおじいさんの孫娘、それが私の友人だ。

出会ったのは比較的最近だ、年が近いこともあり、仲が良くなるのに時間はかからなかった。

出会ったのは町から村へ向かう道の途中、薬草を集めていた彼女、レテイと対面した。

前世から薬草学の覚えはあったため、薬草集めを手伝っているうちに会話に没頭、そのまま薬草屋へと2人で向かったのだ。

「ちようどこの辺りだったな……」

村へ向かう道の途中、残り半分というところで視界に広がって見えたのは大きな森、村は森の中にあるのだ。

森の中は迷路のようになっていて、淫魔としての嗅覚と身体能力と経験からくる勘に従って歩いて行くと、ついた。

村の規模は小さく、例の薬草屋を含めて12軒もない、村というより集落と言う方がしっくりくるほどだ。

規模が小さいのは、ここが魔族の中でも少数しかいない希少種だからだ。

この村の住民は皆、『単眼種』と言われる種族である、体の構造は人間や淫魔同様に二足歩行可能ないわゆる人型で、目玉は1つで人間や淫魔の目玉と比べると巨大で、眉間のあたりに位置している。

そこそこの魔力を持ち、目を合わせた相手を魅了し身動きできなくさせる『邪眼』などを得意とし、元々山の種族であったため目鼻が効き、とても俊敏だ。

そんな単眼種がなぜ少数なのか？それは出生率の低さが原因のように思えるが、どうも男が産まれにくいというのが最大の原因のようだ。

すれ違う単眼種の子供達と挨拶をしつつ、村の中心付近に建つ薬草屋の暖簾をくぐる、すると、まず大量の壺が並ぶという光景が目に見

び込んでくる。

壺の中身は漬物であったり薬草であったり漢方薬のような薬であったり、他には生物の脚や目玉が入れている。

客は壺から欲しいだけのものを取り出して金を払って買うか、店主に欲しい薬の効果を話し、それに応じた材料と薬を作る手間賃を支払って買う。

「おう、サキュバスの坊主じゃねえか」

彼が薬草屋の店主、300年以上生きるかなり長寿の薬学に長ける単眼種の男、気前良くてハンサム、単眼種の男ということもあって妻が5人もいる魔生勝ち組の男だ。

260年ほど前から独学で薬学を学び始め、その30年後に魔王の専属薬剤師に、190年続けた魔王に専属薬剤師をやめ、産まれた村に戻り薬草屋を開いて5人の妻を娶って現在に至る。

彼との間に生まれた子たちは魔界の至る所で見聞を広げるための旅をしているそうだが、で、そのうちの1人が奥さん連れて村に帰ってきて、産まれた孫がレテイというわけだ。

「こんにちはおじさん、レテイさんは？」

「裏で勉強中だと、熱心なもんだよなあ」

「へえ、レテイさんは頭いいんですね」

「俺の自慢の孫娘つ子だからな！それにしても………堅物つてえ言われてたレテイが、まさか坊主みてえな淫魔と仲ようになるとはな」

単眼でジロジロと私を見る店主、怪訝な表情だ。

「何か、おかしいですか？」

「いやいや！言い方が悪かった、すまねえ………レテイはよお、わかっていると思うがいい孫なんだよ、鼻真目なしに村一番の美人だ」

謝ってからタバコを加えて背を丸めた店主は、今度は孫自慢を始めた。

その話2回目だぞおい。

「レテイさん、綺麗で素敵ですよね」

「お！見る目あんなあ坊主！だがよう、男の話がなあーんもありやしねえ、浮ついた話のひとつもねえんでな？心配してたんだよ

………そしたら、いきなり男連れて帰って来て、そいつがまさかの淫魔！男に興味のねえレティが淫魔連れて来たってなっちゃ、惑わさんてんじゃねえか!? って思っっちゃまって………いやぁーあんときはほんつとすまねえな坊主！」

初対面の時、全力全開の炎系魔法で焼かれそうになった時は思わず趣味の鍛冶で作った武器で殺そうかと思っただけだ。

魔法の炎は見た目は大人しくても温度調節やかなりエグいところまで設定できるため、小さい火の玉といえど実は数千度だったりすることもある。

無害そうに見えて実は………という魔法のトラップが一番恐ろしい、そして目の前の店主はそれが上手いのだ。

幾百の火の玉をそれぞれ違う速度で飛ばして来る、のろまな火の玉に油断した頃に数千度を誇る特大火球を放ち、逃げ場をなくした敵を燃やし尽くす。

攻略法は、火の玉の範囲から脱出することだ。

ちなみに、周囲を漂う火の玉を避けて無理に店主を狙おうとすると特大火球でアウト、後方へ離脱しようとすれば特大火球でアウト、左右どちらかで頑張って移動し続け包围網さえ抜ければなんとかなる。

「あはは、いいですよ、惑わせるほど僕は淫魔として成長できてないし、魔力もないから、催眠もできないし……」

魔力があつて魔法が使えるれば避ける必要も何もないんだがな………。

「おおつと！すまん！別に責めるわけじゃあ………」

「じいさ、何してんの？」

店主をじいさと呼んだ単眼で身長170cmほどのショートの子、彼女が私の友人、レティだ。

「うおおいおいおい、レティじゃねえか、勉強はもう………」

「うっさい、またグスタフ君をいじめてたの？」

「そんなわけねえだろお？」

キツ、と睨みつけるレティに店主はタジタジだ、見た目のせいで娘に怒られる父親に見えるが、立派な祖父と孫である。

「坊主はレテイの将来の婿さんなんだ、そんなことしねえよ」

「そ、そんなんじゃないって言ってるでしょ!?この馬鹿じいさー!」

口喧嘩が始まったが、私には止める手立てはない。

いやあるが、ないこととして扱う。

別にあの2人程度なら引き継いだ身体能力で圧倒できる、できるんだが………単眼特有の大きな目の睨みっていうのが、結構怖いものでな。

こうしてそばで見ているぶんには親子ゲンカを見ているようで微笑ましいが、いざあの目が向けられると萎縮してしまうな。

あの大きな目が相手に与える威圧感や圧迫感が邪眼に作用しているらしい、つまり睨むだけでも怯えさせたりできるので、ある意味で邪眼の効果は発揮されるということだ。

「もう！グスタフ！ちよつと来て！」

「え？あつ、ちよつと」

レテイがいきなり手をグイツと引つ張ったためバランスが崩れかける、持ち直しつつどうにかしないとと思うも、頑固なレテイを止める術はない、抵抗を諦め、レテイにされるがままに連行される。

背中から茶化すような店主の声が聞こえる、前を歩くレテイの耳は真っ赤だ。

自制できてるはずだったが、バランスが崩れ転びそうになった拍子に弁が緩んでしまったのだろう、耳が赤く紅潮しているのは漏れたフェロモンによるものだろう。

腕を離されて解放されたのはレテイの部屋に入ってからだった。

「どうしたのレテイさん？随分と慌ててたみたいけど」

「別になんでも………」

「困り事なら、相談に乗るよ」

「……………いい、それよりも！」

レテイは簡素な木製テーブルに薬草学の本とノートを開いて言った。

「勉強、一緒にするんでしょ？隣座りなさいよ」

「うん、じゃあ失礼するね」

レテイの隣に腰を下ろし、薬草学の本を覗き込んだ。

「つ／＼／＼／＼……ちよつと、近いわよグスタッフ」

「ああ、ごめんね」

肌が触れるくらいに近過ぎるとフェロモンが漏れてなくともその効果が発揮されてしまうから気をつけていないとな。

「……………じゃあ、始めるわよ」

「うん」

わかりやすくシヨボンとしたレテイに笑いを堪えた、怒られたくないのでな。

そこからは静かに勉強を進めた。

魔界には、魔族には教育機関はない、文字や言語は統一されているが独学で習う他なく、薬草学などは師を見つけられない限り教わるのは厳しいのだ。

厳しい環境のためか、魔族全体のうち4割程度は文字を読み書きできる、これは現在の人間界の3割に比べて少し高い位で、そのうちの数パーセントが魔王の側近など高位の職につくことができる。

魔王の専属薬剤師も高位職の一つ、レテイもそれを目指しており、口ではあれこれ言いつつ元専属薬剤師の祖父である店主を尊敬している。

私はただの暇つぶし程度でしかなく、そんな高い理想も何もないが、まあ、友人の勉強に付き合うというのも、一種の青春だろう。

さて、勉強に没頭するのも良いが、夕飯に遅れないようにせんとな。

第4話

この世界の話しよう。

この世界には数百から数千以上の種族が生きて生活を営んでおり、主に人間界ににいる人間、ヒトと、魔界にいる魔族にわかれる。

人間界の人間たちは高度な文明と知恵という生産的な一方、言語による会話を行い、国を作り他の国と殺し合いをするという非生産的な面も見受けられる、愚かな行いを繰り返すのが得意のようだ。

魔界の魔族は種族によりそこそこの文明と種族によりまちまちの知恵を持ち、複数の種族によって形成されるひとつの巨大国家を、魔王が治めている、魔族は総じて家族の意識はあるが仲間意識は薄い特徴を持つ。

魔王が復活、または代替わりすると、人間界への侵攻を計画し始める、世界全土を魔族の領地にし、内世界の神々への反逆を行うようである、しかしどのような経緯でそう思うのかは不明だ。

魔族の復活と時を同じくして人間界の人間から1人が勇者として内世界の神に選ばれ、魔王を倒すために——と、まるでファンタジーのゲームの世界観そのものである。

魔界の常識等は、ファンタジーなゲームなどと大きな相違点はないと思われる。

魔界についてだが、魔王城を中心としヒエラルキーの高いものから低いものにかけてより魔界の端に近い場所に住み分けられている。

私は魔界の端なので、ヒエラルキーは低い、つまり下級層だ。

下級層にはあまり立派な建造物はなく、高くても2階建て程度の建造物しかなく、もつとも高い建造物は非常時に鳴る鐘の塔くらいのものだ。

中級層になれば3〜4階建ての建物が2階建てに混じってポツポツと並びだし、上級層は3階建ての建物しかないそうだ。

私自身、上級層についてはわからんことが多い、せいぜい上級層から下級層までを往復する商人に聞いた程度だ、だが信じてても良いと思う、ヒトであれ魔族であれ商人に重要なのは信頼だからだ。

魔界については以上だ、次は世界に視線を戻そう。

現在、人間と魔族の間に戦争は起きていない、魔王はいるのだから戦争を行えばいいのに、と思うかもしれない。

だが今の魔王は400歳を超える高齢魔族、淫魔出ない限り200歳を超えるなんていって劣化するのだ、なぜかは知らないが後継を作ろと考えたのはほんの60年程度前で、私や私の兄・姉を産めたのは奇跡に近い、事実、兄と姉は私と20も違わないらしい。

魔族において、不老不死にもっとも近いのが私のような淫魔と森の民エルフである、魔王はそのどちらでもないため、同じ年齢の淫魔と並ぶと曾祖父とひ孫くらいの見た目の差が出てしまっている。

なぜ今の今まで後継を作らなかったのか？それは魔王がほんの100年と少し前に代替わりして今の魔王がいるからだ。

高齢で代替わりともなれば、自身が魔王としてやっていけるか疑問が出てくる、だがせっかくの代替わりで魔王になったのにすぐに後継者に明け渡すのか、などという葛藤があり、結果として後継を作るのが遅れたわけだ。

当時のことをよく知る人物がいるとすれば、葉草屋の店主だろう、彼は代替わり後も専属薬剤師を務め、最初の魔王の子、長女を何回か目にしたことがあるそうだ。

私の母は都合が悪くあつたことがないようだが、噂は耳にしていたそうだが。

年を少しとって25になったが、別段、姉や兄とあってみたい、とは思わない。

さて、話は終わりだ。

冷えた麦茶を飲み干し、自室の炉に火を入れる。

金属のガラクタを掻き集め、あらかじめ作っておいた砂型を引っ張り出す。

今回は、少し大きめのものを作ってみようか。

——やばい。

やばい！やばいやばいやばいやばい！

「すっごい疼く!!」

グスタフにそんな気は全くないんだろうけど、近くにいるだけでもどうにかなっちやいそう！

そばにいただけで、手が触れてるだけでシタくなっちやう……………うう、ちよつとくらい、襲ってもういいんじゃないかな？

いやいやいや！ダメだつて！しつかりしなさい私！

だ、だいたい！淫魔のくせに、あんな優しいのは反則！甘えたい時に甘えさせてくれるのも鬼畜！勉強に付き合ってくれるなんてマジで彼氏みたいな……………彼氏？

グスタフと、彼氏……………うん、いいかも。

「じいさー」

「お？なんだあれテイ、わかんねえことでもあったかあ？」

「うん、ラブレターの書き方教えて」

「ほーラブレター、ラブレターねえ……………はあああああ!?ラブレター!?それって恋文のことかあれテイ!？」

「うん、グスタフに送ろうと思って」

「どこのクソガキ……………坊主か、なら問題ねえ、彼奴(あいつ)なら店任せられっしな」

(薬草学の勉強に加え、恋文を書く勉強を始めるレテイであった……………)

(なお、恋文のことを知った村人は、早めの春がきたもんだ、と湧き立ったという)

「若いっていいなあ」

第5話

旅立ちの話をしよう。

ついに30歳を迎えた、人間であれば中高年の贅肉オヤジになってしまったが、私は淫魔、年を取っても老けはしない。

14歳頃から身長153cm・体重46kgをキープしたまま成長が止まった、古参の淫魔においては、成長が止まった年を境に成熟したと見られることが多いそうだが、一般的には40歳を超え経験を身につけてからだという見方が多い。

だが、それは淫魔の中でもサキュバスなら、という話、ここ数百年の間にインキュバスの数がごっそり減り、サキュバスは増えどインキュバスは減る一方であった。

インキュバスの一般的に成熟と見なされるのは30歳とサキュバスに比べて若いのだ、成熟を迎えた淫魔は精を得るために人間界へ行つて男（インキュバスの場合女）と性行為をする必要がある。

ついでだが、体の方にも変化が出る、成熟するとツノが生え始め、少し尻尾が長くなる。

母のように経験が多い淫魔は、精を得る必要がさほどなく、あるとしてもおやつくらいの感覚で男を食う程度だ。

最悪、精を得ることができずどうしようもない時は同族同士の性行為でも沈めることはできる、ただ精を得たいという欲求を性的欲求に置き換えて満たしているだけで、早いうちに精を得なければ気づかぬうちに餓死することもある。

私もそうはなりたくない、だから今日までいろいろと準備を行ってきた、魔王城にインキュバスであることと人間界へと行くこと、その間の給料についての手紙を送っておいた、母もなんとか説得した。

「というわけで、母さん、人間界に行つてくるね」

「うわあああん！グスタフ行かないでええええ！」

訂正、説得できていなかった。

昨日はいいって言ってくれたんだが……………心配されるのは嬉しいが、命が危ないのではな……………。

「大丈夫だよ、ほんの2、3週間くらいだから」

「明日でもいいじゃないの！そ、そうだ、今夜はお母さんとセックスの練習にしましょう？ね？それからでも遅くはないわよ？」

「！！！！！！！！！！」

家の前でそういう事を大っぴらに言わないで欲しいんだがな………周りの目がいて………いや、鼻伸ばしてやがる、なんて奴らだ、人妻だぞ、魔王の。

人妻の前にサキュバスで何百という男を食ってきているが、人妻だぞ、一応、魔王の。

「うーん、でも実戦が一番だと思うし、母さんみたいに協力的なエサ………女の子ばかりとは限らないからさ」

「じゃ、じゃあ、お母さんがグスタフの欲しい時に適当な女持ってくるから、ね？グスタフは家を出てかなくてもいいでしょ？苦労しないでしょ？」

淫魔の母親としてそれはどうなんだ………つというか字面がすごいな、誘拐を公然で暴露とは。

「旅なんて面倒じゃない？それも1人で、寂しいわよ？人間界は危険がいっぱいなよ？ここなら、お母さんと一緒に寂しくないし、道に迷わないし、危険なんかないわ」

申し訳ないが、これ以上のニート生活は精神と肉体が懦弱になるのでNG。

「だから、ね？一緒にいきましょう？一緒に、ずっと、ずーっと一緒に――」

「僕も、母さんと一緒に居たい」

母って実は結構深く病みかけてるんだよなあ………愛が重い。

まあ私は重い愛は好物なんだが。

「！、でしよう！？そうよね！お母さんと」

「でもね、僕は淫魔だから、自分で精を得ないといけない、動物で言う『狩り』なんだ、狩りができない動物は………死ぬんだ、いつまでもエサがあると思いついてしまおうから」

「お、お母さんはちゃんと生きた、ピチピチの、それこそちよつとは抵

抗してくるような女を連れてくるわ！」

魚かよ……………。

「でもそれだと、母さんの子供だって胸張って言えない」

「グスタフはお母さんの息子よ！誰がなんと言おうと、グスタフは私のかわいい子供なの！」

そう叫ぶ母に素直に嬉しく思う、前世ではここまで愛されてはなかったから、嬉しいものだ。

「ありがとう、でもね、僕は淫魔として、母さんに胸を張れるようになりたい」

「グスタフ……………」

「ごめんね、母さん、僕どうしても人間界を見てみたいんだ」

真摯に訴えるように、母を見据える。

やがて根負けした母は、ため息を吐いて私を抱きしめた。

「わかったわ、お母さんも負け……………3週間に一回は、帰ってきてね」

「うん、わかった」

今にも泣き出しそうな母、抱き合った状態から離れようとする、すると、母の手が離れる事を惜しむように私の服の裾を掴んだ。

「絶対よ？」

「必ず、帰ってくるよ」

「うん……………」

「心配しないで、母さん、僕を信じて、ね？」

「う……………うん……………」

涙を浮かべ、プルプルと震えてしゃくりあげ始める母に、そつと口づけをした。

「ん……………」

「!!……………グスタフ……………」

間違えて口にしてしまった、なんとか誤魔化そう。

「約束、だよ」

「約束……………うん、約束、守ってね？」

「破ったりしないよ、じゃあ、行くね」

最後に短めのハグをして別れる。

母の涙目の姿で心に傷をつけつつ、別れを告げるべくレティの元へ向かった。

3時間ほど歩き、森を抜け、薬草屋のある村に着いた。

薬草屋に入ると、レティが何やら作業をしていた。

「グスタフじゃないの、どうしたの?」

「実は、伝えたいことがあって」

淫魔として成熟したこと、精を得るために人間界に行くため2、3週間留守にする事を伝えた。

「ふーん……………私の告白を無視して人間界の女とエッチしに行くんだ?」

「告白して……………レティのは勘違いだよ、僕は淫魔だから、フェロモンにあてられて好きだつて錯覚してるだけだよ」

「いいえ、勘違いなんかじゃない、だって、グスタフと一緒にいるだけでドキドキするんだもの、この気持ちは本物よ」

「……………仮に、本物だったとしても僕はレティを受け入れないよ」
「どうして?」

「浮気、するよ?公然と、それも必然的にね——レティを差し置いて人間界でいるんな女の子といろいろと楽しんじゃうよ?そんな夫、嫌でしょ?」

レティは面倒見がいいから良妻になりそうではある、それでも受け入れない理由は、夫である私、インキュバスが本能的に浮気性もため、いくらレティでもそれは耐えられないだろうからだ。

数週間に一度帰ってくるにしても、その数週間は人間界で女を食いまくって帰ってくるのだ、最愛の夫がキャバクラに行くのを黙認する妻の気持ちは男の私には想像し難いが、辛く、気持ちのよくないものであることはわかっている。

「それでもいい」

「え?いやいや、良く考えてよレティ」

「よく考えての結果よ、私はグスタフが好き、じゃあグスタフは私のこと好き?」

「レテイのことは嫌いじゃないけど、でも結婚したいかって言われてもよくわかんないよ」

正直なところ、血縁関係のない姉弟のような関係であって欲しかった、結婚については今は誰ともしたくはないな。

成熟してすぐ結婚とか、高卒で結婚するようなものだ、ろくな収入も何もないこの世界でそれはいかんだろう。

「じゃあ、せめてキスしてよ」

「ねえ、僕は淫魔なんだよ？淫魔にキスされた人がどうなるかはわかるでしょ？」

「ぬぐぐ……………わかった、かわりに抱きしめて」

粘膜接触はさすがにまずい、淫魔の体液は強力な催淫効果を持つ媚薬、私の中でも魔王という父とトップレベルのサキュバスの母の子、正直な不味いとかヤバイとかのレベルではない。

「いや、布越しに体に触れるだけでもアウトだからね？」

「……………握手」

「んー……………できなくはないけど、それでも十分危ないんだけどなあ……………」

「……………ぐすっ」

「あー、もう！はい！10秒だけ！」

「うんー！」

差し出した手に何故か指を絡められる、これは……………恋人繋ぎか。

「ふふっ……………あつたかい」

握手と叫びたのに両手で握りこむようにされているんだが……………。

「幸せそうな顔しちゃってさあ……………はい、10秒〜」

「あ……………う……………」

パツと手を引つ込めると残念そうな声を漏らすレテイ、すぐに表情を引き締めて私の顔を見る。

「帰ってきたらまた話そう、ね？」

「わかったわ……………いつてらっしやい、帰ってきたら、早めにこっち来て」

「うん、わかった、帰って来たら必ずレティに会いに行く」

「ん、早く行きなよ」

シツシツと手を払うように言うレティ、私は何も言わず振り返り、村を後にした。

ふう……………私の旅行のつもりなんだがなあ。

こども愛されると心が痛んで仕方ない。

——レティはこの比じゃないんだろうけど。

「……………グスタフの、ばか……………ぐすつ……………ば、ばがあ
……………つ……………ひつ……………ぐつ、えあう……………ああああばがあ
あああああああ！」

「……………坊主よお、おめえ……………罪だぜこりやあ……………あん
ない娘を、泣かすなんざ、ゼータクつてもんだぜえおい……………」

第6話

初・人間界到達の話をしよう。

魔界の端には人間界からの人間の侵入を妨げる結界が張ってある。が、3箇所ほど穴が空いており、塞ぐかどうか審議され、結局今はそこを通り道として利用している。

人に化けられる魔族が人間界へ行き、その穴を通って物資を運んでくる。

許可さえ出れば誰でも通れる穴ではあるが、許可の基準が厳しいと有名なのだ。

穴の周辺は要塞化されている、穴の部分には巨大な門があり、門の近くには最低でも8人がついており、警備は厳重だ。

門の向こうの穴を通り、人間界へ行くにはこの厳重な警戒の中に突っ込み、種族の検査、持ち物検査、人間界へ行く明確な理由の提示などを行う必要がある。

毎日6回、門が開き、門が開くまでの間にゴーサインが出た者だけが人間界へ行ける、間に合わなければ次の開門まで待たねばならない。

まあ私は淫魔だからほぼ素通りできるんだが。

人間界へ行く魔族たちの長い列に並ぶ、20人ほどの並んでいるようだ、多い日には50人から減らないこともあるそうだ、今日は付いている。

「次！」

「はい」

「種族は？」

「グリフォンです」

「ふむ、持ち物は？」

「この籠だけです」

「人間界へ行く理由は？」

「人間界に自生する果物の採取です」

「……………よし、通ってよし、次！」

意外にも質問だけですぐに終わるようだ、身体検査がなくてよかった。

「次！」

おっと、私の番だ。

「はい」

「種族は？」

「淫魔です」

「サキュバスか？」

どうみてもインキュバス……………いや見えないか。

「いえ、インキュバスです」

「インキュバスか……………持ち物は……………たくさんあるな」

「3週間ほど滞在するので」

「なるほど、荷物をこっちへ」

「はい……………つと」

「聞くまでもないと思うが、人間界へ行く理由は？」

「食事です」

「わかった、荷物の検査が終わるまでそっちで待っている」

「はい」

しばらく待つと、問題ないと出た、門が開くまで待っているとしよう。

本でも持って来ればよかったか、いや、あと3分くらいだ、いいタイミングだったようだな。

「開門！」

「よし！通れ！」

開いたか、しかし、でかい門だな。

そろそろと門から穴の先、人間界へと歩いて行く集団、その中に混じって私も行く。

魔界から人間界へ行くのにこの人数で固まっただけで大丈夫かと思われそうだが、穴を超えるとそれぞれがバラバラの座標で人間界に飛ばされるらしい。

それでも穴からは1km離れた場所という程度だからさほど支障

は無いらしい、バラバラの座標と言っても穴の方向にランダムというだけで、通った穴とは逆の方向に飛ばされることはない。

通り抜けた先は……………森だった。

木々が生い茂り木漏れ日が地面へと注ぐ森の中、後ろを振り向くと開けているが、何か違和感を感じる、時空の歪んでいるような、そんな違和感。

おそらくあの周辺に穴があるのだろう、となると、穴から200m程度の場所に出たというわけか。

前を向き直して歩く、アテはないが、とりあえずは川を探そう、川の近くなら最低でも集落はあるはずだ。

今の私のは白い肌に結び上げた銀髪、剣士風の装いをした旅人といった風体だ。

胸の部分には自作した胸甲と脚甲、腰鎧をつけており、ちよつとしたプレートアーマーだ。

右手には拳を握りやすい籠手を、左手には頑丈な小型のシールド付きの籠手をしている、左手の籠手のシールドは少し凝った作りをしており、状況に応じ、シールドの大きさを換えられるギミック付きなのだ。

趣味全開過ぎて使わんと思うが……………。

とはいえ、全部安物の金属で作ったものだし、防御力はさほど無いだろう、しかし旅人が豪華な装飾のあるプレートアーマーや、頑丈そうなフルプレートアーマーだったら違和感しかないだろう、ほどほどの装備の方が良い。

そして左の腰には簡素で装飾のないロングソードを吊っている、あまり装飾華美であると面倒ごとに巻き込まれそうだし、これくらいでいいだろう。

顔はどうにもできんが、まあ、見ようによつては旅をしながら修行している少年剣士に見えないこともない、純朴そうな少女くらいなら、おとせる……………だろうか？

少し不安だ、姿を変えて高身長イケメンに……………虚しいだけだな、やめておこう。

気を取り直して、人間の村の一つでも探すとしよう。

しかし……………作ってきてみたわけだが、この装備なかなか重量があるんだな。

いや、人間基準だとフルプレートアーマーくらいの重さがあるんだが、何ぶん私は身体能力継承のおかげかそれを感じにくいわけだな、こうして重みを感じているのはけっこう新鮮だ。

人間だとまず歩けるかどうかという重さだろう、分解してもパーツそのものがかなりの重量物なわけだし、手での運搬は不可能か。

……………む、遠くで人影が見えた、水汲みだろうか？なら近くに集落はあるはず。

水汲みと思わしき人影がいた場所まで来た、さあ答え合わせは……………アタリだ、小さな村のようだ。

せっかく見つけた餌場だがここはパスだ、魔界に近過ぎて問題が起きたらよそ者の仕業だと直ぐにバレてしまう。

まだ魔界を出て3時間程度、残り20日もあるのだ、焦る必要はない、獲物にとって絶好のチャンスとは、ハンターが焦っている時だ、焦っている時はどんなプロでも仕損じる。

餌場には不向きだが、罾を仕掛けるにはなかなか良い地形だろう、全体をよく見れば、かなりの数の馬車がある。

移動しながら生活する民族でないかぎり、馬車は輸送のためのもので、おそらくここは商人が立ち寄る村なのだろう。

物の流れと人の流れは比例する、市場に人が来るようにな。

つまり、ここで張っていれば獲物が向こうから来てくれるというものの、しかし獲物を得るためには根気良く待つ必要がある、獲物が来るかどうか確定しないのが欠点だ。

もしものための予防線としてこの村は覚えておこう、となると、あの程度の村人には顔を見せておいた方が良さか。

人間界の金は母がいくらくれた、旅に金はずきもの、帰ったら感謝と土産話をせねば。

とりあえず、旅人という設定に合うようにそこそこの金額を使って買い物や食事、宿を借りねばならない。

長旅で疲れたため3日滞在する、という方向で良いだろう。

さて、まずは……………食堂からだろう、幸い今は昼時、なるべく多くの客のいる店を探して入店する。

「あい、いらっしやいー!」

40代そこそこといった女性が聞くだけで元気が出そうな声でそう言った。

「オススメのメニューをお願いします」

「あいよ!ん?お前さん見ない顔だね?」

おっと、これは嬉しい誤算だ、向こうが関心を示してくれた方が楽になる。

「旅をしていますが、2日ほど歩いてやっとこの村にたどり着いたわけです」

「そりや大変だねえ、となると……………お腹へってんだろ?」

「もうペコペコですよ、ろくなもの食べてないです」

うそだ、ちゃんと母の作る極上の料理を食ってから来た。

マザコンだと?褒め言葉だな。

「そうかい、んじゃあサービスだよ!ほら食いな!」

「おおっ!」

やはり物流が盛んという読みは当たっているようだ、川で取れる大ききではない巨大魚、狭く暗い森で育てられるとは思わない山盛りの穀類が出て来た。

サービスされているとはいえ、ここの村人にも払える料金でこの量、物流はかなり良いらしい。

おそらく、馬車で行ける範囲に町があるとみた、魚は水を張ったオケにいれて1日持つとして……………そう遠くはないはずだ、歩くとなれば3日くらいだろう。

「美味しいですね、この魚はどこから?」

「馬車で1日半くらいの街さ、そこでおろされてるもんだよ」

4日ほど探索を兼ねて森を歩いてみるか、その後2、3日歩いて街に行けばいいだろう。

「ここの周辺に村や集落はありませんか?」

「街の方向……だいたい、あつちかねえ、に向かうところちより大きな村が見えるよ、うちの村に来る人はみんなそこによつてから来るんだ」

「なるほど……ありがとうございます、1日滞在したらその村に行つてみようと思います」

「それはいいけど……ずっと思つてたんだけど、お前さんかなり歩きづらそうな格好してんね、平気なんかい？」

「多少の動きづらさはありませんが、鎧とはそういうものです、それにこれは軽いほうなので平気です」

他人から見ても重く見えるのか、鈍重だと思つて奇襲をかけたら………という具合に、丁度いい目くらましになりそうだ、見た目以上によく働く鎧だな。

「本当かい？城下町の騎士様みてえなのに、軽いもんなだねえ」

「城下町の騎士？」

「そう、ここの森を抜けて川の上流の方に登つて行くと、おーきな城が見えてくる、そこはたいそう大きな王国でね、こんな小さな村が出した依頼（クエスト）もちやーんと受け取ってくれるんだよ」

「地方の村もしっかり管理する、その王国は良き国ですね」

「だろう？しかも、城下町にはあんたみたいな鎧を着た騎士様が巡回してて、治安を守つてるつて話さ、さらにイケメン揃いだときたもんだよ」

「町民を守るイケメン騎士たち、ですか………剣を志す者として、憧れます」

なりたいとは思わないが。

「あんたも顔はいいけど………ちよつと子供っぽく見えるからねえ………まあ、一回でいいから行つて見てみな、それで感想を聞かせておくれよ」

「立ち寄ることがあつたら、必ず」

あと、前半の子供っぽいは余計だ。

食事を終え、金銭を置いて立ち上がる。

「ごちそうさまでした、また寄らせていただきますね」

「ああ、いつでも来な、夜中に来りゃあ酒も出るよ！あんたが飲めるよ
うには見えないけど」

「ははは……酒はあまり飲まないようにしておりますので」

「ええ？そいつは難儀なもんだねえ、宗教かい？」

「いいえ、飲むと剣が鈍るので」

「カーツ、あんた、見ための割にしーっかりとしてるねえ」

だから余計だ、見た目の割には本当に余計な一言だ。

今更気になるものでもないが、何度も言われるとさすがにくるな。

「では、また」

「ありがとさん！またいらっしやいよー！」

食堂を出て、比較的広い大通りらしい道を歩く、あちらこちらで商人たちが取引をしている、安いものを大量に買取り、高いものを多く売りつける、こんな辺境の村でも商魂はたくましいようだ。

おっと？あの黒いのは……ふむ、多めに持っても大丈夫だろう、買うか。

「すみません」

「へい！なんだいにいちや……いや、姉ちゃん？」

「あはは、お、男です」

「じゃあにいちやんだな！何か探し物かい？」

「こちらの木炭をいくつか」

「木炭を？あんたみたところ旅人が冒険者だろう？何に使うんだ？」

「料理や寝る時に長い時間火をつけておくのに便利なんです」

実際、長時間燃える炭の類は持つてて損はない。

私は料理にはそんなに使わない、もっと別の方に使う。

「ほう、なるほどそういう使いかたが……あいわかった、幾つだ
？」

「3本ください」

「まいど！また来てくれよー！」

思ったよりかるい……いや私がバケモノなだけだが。

紐で吊るした木炭を片手に、ぶらぶらと現地の道具屋を探す。

大通りは商人が詰めているから、おそらく外れたところの通りに

ひっそりあるはずだ。

またしばらく歩くと何やら駅の売店のような小屋が見えた、小屋には飾り物などが入ったザルが吊るしてあり、薬草や旅で使う道具類が並べてあり、奥の方には武器や防具が置いてあった。

あれが道具屋なのだろうか？

「すみません、ここは？」

「ん？道具屋だよ、ボク……………ん、女の子かな？でも鎧着てる、冒険者？」

活発な印象の村娘、身長は167cmくらいか、短めの髪型でボーイッシュだが胸がやや大きめで、同年代の男子にからかわれたことがありしうな少女にまたしても女子と間違われた。

「男です、酒も飲める歳です」

「え!?!男!?!カワイイの!?!」

「はい……………男です」

「なんとというか、ごめんなさい」

「いえ……………慣れてますから」

この村の人間には私が女、しかも子供に見えるらしい……………実際子供容姿で固定されているから間違いはないのだが、精神年齢を考えるとただのジジイなんだよなあ。

「本当ごめんね？旅の人だよな？あつても鎧着てるから王国の騎士様かな？」

「普通の旅人です、この店では何を売ってますか？」

「いろいろだよお兄さん、薬草、上質な薬草、解毒薬、下級のポーシヨン、投げナイフ、青銅の剣、なんでもあるよ」

ひとつひとつ指差しながら説明する少女、ふむ、ひとつふたつ買つてくのがいいか。

「いろいろあるのですね、じっくり見させてもらっても？」

「いいけど、値引きはしないからね？安い女じゃないんだから」

「そこまで切羽詰まってませんよ……………」

会話しつつ商品を眺める、さて、何を買おうか？

第7話

同族（とは微塵も思っていないが、一応種族的には魔族であつてるやつ）の殺しの話をしよう。

「こちらの薬草と、こつちのポーションを4本ください」

「あいよ！お兄さんなかなか見る目があるねえ、鑑定スキルを持つてるの？」

「勘がいいだけですよ、それに、良い賞品を用意できるあなたほどではないですよ」

鑑定スキル……………物質から物事の本質まで見抜くことができると言われるスキル、身近な存在だと母がかなり高位の鑑定スキル保持者だったな。

なんでも、媚薬の調合に使う材料の選定に必須だそう。

そういえば言つてなかったな、この世界では、スキルという『伸ばせる才能』と、ユニークスキルという『個人固有の才能』の2種類のスキルが存在する。

スキルは努力次第で習得可能で、ユニークスキルはその才能が無ければそもそも習得が不可能なスキルだ。

ユニークスキルは誰でも持っているわけではなく、また遺伝で決まるものでもない、薬草屋のジジイがユニークスキル『千里眼』を持っているが、レティは持っていないように。

ユニークスキル持ちはそれを伸ばせばその分野でトップに立つことも容易く、実際、薬草屋のジジイもユニークスキルを用いた魔法による遠距離狙撃を得意としている。

ユニークスキルは継承されないが、ユニークスキルの影響は継承されるようで、薬草屋のジジイの千里眼の特性、超超遠距離を知覚できる能力が作用しているのか？レティはそうとう眼が良い、かなり遠くのものでも一瞬で判断できるほどだ。

私もそういうユニークスキルが欲しかったが、身体能力や才能とトリードしてまで欲しいものではない。

そもそも、数多の才能を有し、練習次第であらゆるものの頂点に立てる私が、今更特殊能力をやると言われてもな……………。

「こう見えて長いからね、はい！また買ってね！髪の毛の綺麗なお兄さん！」

「男性を褒める言葉としてそれは適当には思えません……………とりあえず、ありがとうございます……………あなたの髪も、燃えるような紅がとても綺麗です」

「ビューツ！お兄さんったら褒め上手なんだから、見た目だけじゃなく心も綺麗とは恐れ入ったよ、これサーブス、持ってって！」

そう言って渡されたのは小さなナイフ、サヤがなく、持ち手は握るにはやや小さく、刃も鋭いわけではなく、匂いを嗅いでも毒が塗布されてもいない、御守り……………にしては服の内側に入れるにはやや物騒だ。

「そんなジロジロ見たって何もありませんよ、ただの投げナイフだし」

「投げナイフ……………」

ああ、だからこれほど小さいのか、子供用の包丁くらいの大きさで投げやすそうだ。

だが見た目が少しな……………いや、サーブス品でこれなら十分か、店頭の安物の薬草類と同じように並べてあるし、単価自体はそんなに高く無いのだろう。

消耗品であると考えれば当然、弓矢の矢と同じ、もしくは銃弾だな。

こんな粗悪品でも本気で投げれば4人くらいは……………イケるか？パワーの制御をしなければ貫通して危険だな。

……………石飛礫や投げナイフであっても細心の注意を払わなければいけないのはどうにもなあ……………慣れるしか無いか。

「そ、こんななんでも当たればケツコー痛いよ？薄い皮の鎧くらいなら貫通して刺さるし、肌当たったらタダじゃ済まない、まあ到底人を殺せるようなもんじゃ無いけどね」

「なるほど……………ありがとうございます、いざとなった時に使わせていただきます」

鎧の内側に忍ばせておくか……いや、左の籠手にある隙間に入るか?……おお、なかなかいいぞ、あとでベルトでもつけておいて、いざという時に外して投げられるようにしておくのも面白いか。

いっそ、盾の裏の隙間にボウガンのようなものでも仕込んでおくのもいいかもしれない……まあ、飛び道具はひとつ持つてるんだが、世界観が崩れそうだし使うのは控えたい。

「いやあ、お兄さんほんとうに優しいし丁寧だねえ、ここの男どもなんて私を子供扱いする大人か、年のはなれたガキしかいないし」

「年の近い男性はいないのでですか?」

「いるっちゃいるけど……なんてーの?イシキ?されてるっていうかさ、話してる時はいつもオドオドしてるんだよね……だから、お兄さんみたいな普通の反応は久しぶりなんだよねー」

「いや、倍くらい歳が離れているんだが、見た目は年下だが倍あるかな。」

「そうでしたか……しばらくこちらに滞在する予定ですので、なんなら、ちよつとした話し相手くらいにはなりますよ」

「ほんと!?やたつ、お兄さんかわいいのにイケメンだねえ」

「かわいいは……いや、淫魔的にはそういう褒められ方はないだろう、たぶんな。」

「来たら飲み物くらいは出すよ、どうせなら旅の話とか聞かせてよ」

「ええ、いずれかは」

「ん……あ、お兄さんちよいちよい」

「はい?」

手招きされたため少し娘に顔を寄せる。

娘は髪をかきあげて私の耳に口を寄せて来た。

「そのまま聞いて……(あれ?なんかいい匂いする)……お兄さんから見て左手の方に、農具を持った男が見えるでしょ?」

「……はい、見えました」

小声での指示に従って横目で見ると確かに農具、鍬を持った男が見えた、野暮つたい農民らしい服装の、この村でよく見る服装だ。

「あいつが私と同一年のやつ」

「彼が、あなたと話をする時に挙動不審になるといっう？」

「そうよ……………あつ、こつち見た、つてかなんかイラついた顔してるー」

遠目に見ると私と娘は親しげにでも見えるんだろう、店員と客の距離が近いだけであれだけ反応してはなあ……………娘に面白いように言われるのも当然か。

しかし、年からして思春期であるのだからそういう面倒臭さも理解できる、私も最初の人生の頃は……………いやまだマシだったな。

10mまで近づいたところで娘が顔を離れた、少年、いや、青年は私から1mほど離れたところで止まると娘を見た。

「ずいぶん楽しそーじゃねーか、イセリナ」

「そりゃあね、リク以外の同年代だし、話も弾むのよ」

「俺と話してるときは、そんなに嬉しそうな顔してなかったのにな」

「だってあんた、いつも話すときはオドオドしてるかモゴモゴしてるかのどつちかだし、今も足震えてるし」

「うぐつ……………」

哀れ、DTの青年よ。

「こつちのお兄さんはかっこよくて話し上手で褒め上手、見る目もあるし、あとかわいい」

「つ……………イセリナはこういう男がいいのか？」

指を指すな指を……………つて、こう書くと読みにくいな、指を、指すな、指を、うむ、これでよい。

「こんな……………女顔みたいなやつがいいのか？」

「……………会っていきなり罵詈雑言とは、関心しないな、少年」

さすがに失礼だぞこいつ、ど田舎だからといって最低限の礼節さえわきまえられない男は大嫌いだ。

「なに……………」

「君の目の前の低身長男は、君よりもいくつか年上だ……………言葉を選ぶことだ」

「へっ……………よく言うぜ、チビのくせにいつちよ前に騎士様気取りかよっ…ママゴトなら家でやってろー」

「リク！……ごめんねお兄さん、気を悪くしないで、お詫びに……」
男の（なかなか目的を得た）罵倒に対して娘が頭を下げて謝ってきた、詫びなら飯でも奢ってくればありがたいのだが。

「イセリナ！なんでお前が！」

「こつちのセリフよ！どうしてそんなにお兄さんを邪険にするの？嫉妬なの？」

「バツ、ち、ちげえよ！」

「ならやめなさいよ、あんたも男なら、かつこ悪いとこばつか晒すんじゃないわよ」

「っ………チツ、うるせえうるせえ！お前に分かるもんか！」

さんざん喚いた男は走って逃げていった。

いつの間にやら、周囲の視線は突き刺すように私と娘に集中していた。

「………本当にごめんなさい、気を悪くしたわよね、お詫びになるかわからないけど、何でもするわ」

「では、申し訳ないところですが、私手持ちがあまりないもののでして、良ければ滞在期間中の……2日分の食事をお願いしたいのですが」

「そ、それでいいの？もっとほら、その体を喰わせろーとかはないの？」

正直そつちでもいいが、2、3日いるだけの村でそういうことをしては噂がたつ、できれば避けるのが良いだろうな。

「はしたないですよ、イセリナさん」

「ごめんごめん………そっかー興味ないか………そうだ、お兄さんの名前聞かせてよ」

「私の名前ですか？グスタフと言います」

「グスタフ………うん、お兄さんで！」

変えないのか………。

「私はイセリナでいいよ、これからよろしくね、お兄さん」

「はい、よろしくお願ひします」

タダメシ確保、と。

「泊まるならそこ曲がったところに宿があるし、ここにも近くて安く

ていいよ、あつ、どうせならうちに来る？そっちのほうがご飯の都合とかいいよね？」

「お邪魔でさえな」

『ければ』、と続く声は悲鳴に掻き消される。

大通りほうから聞こえた悲鳴は伝染し、怒号も混じっている。

「ゴブリンだ！ゴブリンが出た！」

「子供を家の中に！男は武器持ってこい！」

ゴブリン……小鬼とも呼ばれる、ファンタジー世界のいわゆる雑魚モンスターの一種だが……力のない人間には脅威か。

基本馬鹿だが、小さくてすばしっこく、不細工だが人肌を貫通する程度の武器を作ることができ、糞と毒草を混ぜて作った即席の毒を使える程度には頭が回り、発想力がある。

その程度でしかないが、それでも毒がある以上、十分に脅威たりうるのだろう。

そんなことを考えていると、気持ち悪い緑色の肌をしたゴブリンが数匹こつちに向かってきた。

「ご、ゴブリン……」

全部で4匹、それぞれ木を削っただけの簡素な棍棒や、石を削り出して作ったナイフを持っている。

「きしゃああ！」

「ひっ……」

喚き声を出すゴブリンに小さく悲鳴をあげる娘、さて、ゴブリンを殺すにしてもどうするか。

剣を抜いてもいいが、手入れが面倒になる、盾で殴って殺す方が良さいだろう。

「う、うおおおおー！」

おっと、リク？とかいう小僧がゴブリンに突っ込んでいったな、くわ一本でどこまでいけるのか……。

「くそ……このー当てれー」ブンブン

いやそんな盆踊りみたいなふらふらな動きじゃ当たらんだろう、仮に当たってもダメージはさほどないことが想像できる。

「イセリナさんは隠れていてください、私は小鬼退治に行きますので」
「き、気をつけて……」

「ええ、では」

駆ける、クワを振り回すリクとかいう男の横をすり抜けて、半方位状態で有利だったゴブリンのうち一体をシールドを叩きつける。

「ぐぎえっ!？」

素手で動物を解体しているときの気色悪く、そして耳を塞ぎたくなるグロテスクな音を発したゴブリンAの肉体は、空中を舞って数メートル先の地面に転がった。

吹き飛ばされたゴブリンAの上半身はあらぬ方向を向いていた、およそゴブリンの骨格からは不可能と考えられる向きであり、動く気配もない。

確実に、死んだ。

「ひとつ」

続けて、倒れた仲間に向かって謎の言語を発して呼びかけるゴブリンBの頭部に、遠心力をかけた手加減込み込みの左フックをお見舞いする。

「gツツツ………」

意識の外、死角からの攻撃に声にならない悲鳴のようなものを出そうとしたゴブリンBだったが、聞く事叶わず、頭部は肉体から弾け飛んで森の木にぶつかり半分潰れた状態になった。

……もう少し手を抜くべきだったか、パンチで首を飛ばすのはやりすぎだ。

「ふたつ………それ」

気を取り直し崩れ落ちる首無し!!?!のゴブリンBの持っていた石造りのナイフを拾い、一番近いゴブリンCに向けて『気をつけて』投げる。

「ピギャアアアアアアア!!」

右脇腹付近にナイフが深く刺さったゴブリンCは、豚のような悲鳴をあげ、その場にうずくまるようにしゃがんだ。

どうやらナイフを抜こうとしている様子だ、だがそのナイフはお前の同胞のものだぞ? きつと毒が塗ってあるぞ? 解毒薬、もしくは解毒

草の準備はいいのか？

「っ……………kっ……………」ガクツ

「準備不足は死を招く、みつつ」

「これであと一匹……………まだタップダンスしてるのかあいつは、いや盆踊りか？」

「全然攻撃が当たる気配が無い、実はあいつゴブリンとタッグ組んでる曲芸師なんじゃなからうな？」

「まあいいか」

ゴブリンCの側に落ちていた石斧を拾い上げ、盆踊りをかましている馬鹿をおちよくるように避けているゴブリンDに向けて、正確に頭を狙って投げる。

ヒュオツ……………グジュツ！

「うわあっ!?!」

いきなり石斧が頭から生えたゴブリンDに驚き尻餅をつく馬鹿、見える範囲ではこいつらで終わりか。

「小僧！私は通りを見てくる、お前は娘のそばにいろ！しっかり守りきれ！」

「い、言われなくたってー!」

馬鹿を小娘につけさせ、私は人間の範疇のスピードで通りに向かい走る。

通りにはさっきの倍ほどのゴブリンがいた、すでに数匹くたばっている様子だが、それでも6匹はいる。

男手が食い止めているうちに邪魔な女子供は引いたようだ、通りとはいえこの村は小さいから、小さな棍棒でも余波で怪我人が出かねない狭さだ。

だが、障害物が無いのなら私の独壇場よ。

とりあえず、さっき学習した手加減の仕方をよく反復して……………せい。

ゴジュツ

1匹。

「うおー!」

「石飛礫か！」

ゴジュツ

2匹。

「白い鎧のにいちちゃんじゃねえか！」

「遅れました！」

コツは掴んだ、あとは村の男手と協力して捻り潰すでしょう。

「包囲したまま狭めてくださいー！」

「おうよ！お前から聞いたな！」

「おう！てめえらビビンじゃねえぞ！」

いい連携だ、士気も高いか。

狭まっていく自由に歯噛みするかのように唸る残り4匹のゴブリ
ン。

……………よし、これくらいの距離ならば。

「一振りでいけるか……………」チャキツ

スラアア……………

剣を抜く、何のことはない、いつも通りにやる。

力を抜け、自然体だ。

方向は左から右、無理も破綻もない軌道、ゴブリンの胴体のだ真ん
中を両断するイメージ。

その軌跡を描き、剣でなぞる、出来るだけ早く。

「下がってください」

一声で男達は二、三步後ろ下がる、好機と見たゴ布林が駆け出そ
うと脚に力を込める動作、その小さな膝が少し曲がるその一秒未満の
時間。

その時間に割り込んだ刹那の剣が、ゴ布林を両断した。

悲鳴もなく肉塊と成り果てるゴ布林たち、死んだことに数秒経つ
て気づいたゴ布林たちは、顔を歪ませ驚くばかりであった。

「抜くほどでもなかったか……………？」

そうボヤくと、剣を収めた。

振り返ると、男達は驚きに染めた表情で私を見ていた。

「い、今、何をしたんだべ？」

「見えなかっただ……」

「これが……『神速』ってやつ、なのか？」

パワーのほうは申し分なかったが、どうやらスピード、振る速度の手加減を忘れてしまったようだ。

彼らから見れば、私の剣が全く動いていないはずなのにゴブリンが死んだように見えたからだろうか。

それなら私でも驚いただろうな、剣閃の見えない頃の私なら、な。

「みなさんありがとうございます、怪我はありませんか？」

警戒心を抱かせぬよう笑顔で話しかける。

「あ、ああ、あんたのおかげで助かったよ」

「避難した子供達や女性のほうは？」

「問題ない、向こうにはこっちの3倍以上の男手がいるんだ」

ひとまず安心したのか、緊張で上がり気味の肩が下り、顔の筋肉が緩んだ。

「では、避難場所を守っている人たちから何人が引き抜いて、3人1組で村中をしらみ潰しに探しましょう」

「わかった、隠れられてちやたまらねえからな、足の速え奴は避難場所に行つて6人くらい連れて来てくれ！」

「あいわかった！」

脚に自慢があるのだろう筋肉質な30代前半ほどの男が走つて行つた。

「到着を待ちましょう、まだいるかもしれないので、武器は構えているようにしてください」

「あんちゃんは剣を抜かねえのかい？」

「狭い場所でのような長い剣は物干し竿にも劣る棒切れ、短剣やナイフのほうがやり易いのですよ」

柄頭を叩いてそう言う。

「へえ、あんちゃんは考えてんだなあ、通りでオラの大ガマが振るいにくいわけだあ」

「草刈鎌にしとけ言つたらうにお前は……ま、結果としちやあにいちちゃんの手助けになつたみてえだがな」

「長い獲物には近づくの躊躇うのは、人間もゴブリンも一緒ですからね」

槍の使い手に剣の使い手が挑んでも勝ち目は無い、それほどに獲物のリーチや間合いというのは戦いにおいて重要になってくる。

目が見えずとも獲物に応じた的確な間合いが取れるなら、心得が無くとも生き残るだけならそれだけでも十分なほどだ。

まあ、剣閃さえ読めれば間合いなどどうとでもなるがな。

「おーい！連れて来たぜえー！」

速いものだな、脚に自慢があるだけはある、もしくは単に近いのか。さて、搜索を開始するでしょう。

「食事に寝泊まりできる場所まで世話をしていただけなんて、ありがたい限りです」

「いいのいいの！私と村を助けてくれたんだから、遠慮しないで」

一人暮らしである小娘、イセリナの家にお邪魔している。

スープの香りが食欲をそそる晩飯前のひと時、鎧を脱いで椅子に座りイセリナの料理ができるのを待つ。

「お湯の方はどうだった？」

「丁度良い湯加減でした」

「そう？ならよかった」

風呂で思い出したが、この世界にシャンプーやらリンスやらボディーソープやらは存在しない。

ので、自作したものを持ち歩いている、母も絶賛の効果を持つ優れもので、魔界の家で生活していた頃は母が『おやつ』を食べる時に重宝された。

使用者が私と母、それとレティしかいないため、他の魔族や人間のボサボサでベツトベツトの髪を見ると、自分の髪のツヤ加減とサラサラ感でちよつとした優越感に浸れる。

ちなみに、炭を買ったのはこれのためである。

顆粒状にして混ぜることで髪の汚れをよく落とせるようになるのだ。

なぜこんな話をするかと言うと——目の前の年若い小娘の髪が汚すぎて我慢ならないからだ。

まあでも、普通に見ればなかなかかわいい顔をしている、磨けばひかr……………。

ドクンツ

「っ……………」

まずっ……………た……………。

そう、だった……………淫魔は、性を

得な……………ければ……………。

近くの、異性の匂いを元に……………。

「襲い……………出す……………っ」

だが、人間界に来る前に、薬は作ってもらっているっ……………！

即効性のある、白いポーシヨン！

カバンの中に、たしか、ある……………はず……………。

「もうすぐできるからね……………っってどうしたの!?!どこか痛い?」

「ぐっ……………クスリ……………カバンに……………」

「カバン?カバンのどこ!?!」

「外の……………ポケットに……………」

「どれどれ!?!こ、これ!?!」スツ

「ソレ……………ダッ……………」

「待つて！今開けるから！」

くそっ……………情けない、私ともあろうものが、たかが種族特有の持病の発作程度で、体が動かんとは！

イセリナに白いポーシジョンを飲ませてもらい、発作が収まるのを感じる。

「……………はあ……………ふう……………」

収まった……………なんとも辛いものだ。

いつの間にか椅子から転げ落ちて床に這っていたようだ、そこをイセリナが気づいてポーシジョンを飲ませてくれたということか。

……………ダメだな、発作の時の記憶が薄い……………それに気持ち悪くて最悪の気分だ。

「だ、大丈夫なの？お医者さん呼ぼうか？」

「いえ、大丈夫です、ただの……………発作ですから」

すくつと立ち上がり、イセリナに礼を言う、飯風呂寝床にプラスで命まで助けてもらうとは。

いや、正確にはイセリナの処女か、どちらにせよ、よかった。

「辛かったらすぐ言つてよ？すぐ駆けつけるから」

「ありがとうございます……………ああ、その瓶は捨ててください」

「え？またクスリを補充しなきゃいけないんじゃないの？」

「旅の途中ですし、持っていても邪魔ですから」

から瓶なんて水をすくうか物を詰めるくらいしか使い道がないからな。

身軽な方が良いだろう。

「そう？じゃあ捨てておくわね、ごはんできてるけど、食べられる？」

「もうお腹ペコペコで、早く食べたいですよ」

シチューは美味しかった。

美味しい飯で気分も良くなった、やはり食は偉大である。

「あつ、寝場所は一緒にするよ」

「えっ？？」

第8話

女子と添い寝をする話をしよう。

いやいや待って待て。

「問題ありますよね？」

「寝てる時にさつきみたいになったら自分でクスリ飲めるの？」

「う」っ……………」

「また発作が起きた時、私がいたほうが便利でしょ？」

ぬう……………背に腹はかえられぬ。

「……………そうですね、その時はお願いします」

「任せてよー」

しかし、この持病には本当に悩まされる。

全ての淫魔が発症しかねないこの発作は、性を得ることに抵抗のある——処女・童貞意識の高い淫魔の発症率が高く、性を得られない間、変則的に発作が起きる。

つまり定期的に性を得ているなら、発作はでない、と言うわけだが……………正直、SEXをしようとは思わない。

変な話かもしれないが、SEXはいわば淫魔が淫魔らしいといえる特徴であり、人間で言うところの『呼吸』のようなものだ。

私は呼吸すらいらないと思っている、ようだ……………もしかしたら極端に性欲が薄いのかもしれん。

クスリも多くはない、1つ消費したからあと2本……………。

「いったん調達に帰るのが良いだろうか……………」

いや、ダメだ、せめて人間界で小銭くらいは稼いでおきたい、そしてそれで土産を買わねば帰れん。

主に母とレテイとレテイの祖父（薬師）に。

母とレテイは言わずもがな、薬師のじじいにはクスリを安く売ってくれた礼として、なにか珍しいものでも持っていかねばならんだろう。

「質素で悪いけど、一応はベッドだから」

と言って通された部屋はイセリナの寝室のようだ、質素らしい木製

フレームとボロボロのシーツのシングルベッド、タンスや小物などが置いてあり、女の子らしい部屋と言える。

で？

「あの……………あつ、私は床で」

「その……………私と一緒にベッドじゃダメ？」

「そういう聞き方は困ります……………」

やめてくれ、その聞き方は効く。

「あ……………じゃあ一緒に寝るよ！はい！決まり！」

「ええ……………まあ、それで良いなら」

あまり贅沢を言って駄々をこねてもいけない、屋根があり、壁があり、シーツがボロボロとはいえふかふかのベッドがある。

なんて事ない、私の家よりちよこつと質素なだけだ、それにこれから寝泊まりする宿は基本どこもこういうものだと思っておけば、変な失望をせずに済む。

高望みは挫折への近道、低く地を歩き山を登るように高きを目指せば良いのだ、何事もそう、私の剣もそうだったように。

しかし女性との添い寝は精神衛生上非常によろしくない、こうでもないかと気づいたら死んでいたなんてことになるから仕方ないと言えれば仕方ないんだが……………はあ、淫魔である自分を激しく呪い殺したい気分だ。

「では私はこつちを向いて寝ますので」

「うん、いいよ」

「では、おやすみなさい」

「ちよいちよいちよーい!!まだ寝るには早いんじゃないの？」

「え？」

「いやーせっつかくだし、なんかお話でも聞かせてよ！」

「話、ですか……………では、私の近所の鍛冶屋のお話でも」

「故郷の話だね？聞かせて聞かせて！」

ワクワクと言った表情のイセリナに、鍛冶屋のオヤジについて話をしていた。

話の途中で睡魔が限界になったようで、子守唄がわりにスヤスヤと

眠っているようだった。

よく眠っていることを確認し、私も目を閉じて眠りにつく。

眠るイセリナ的首筋が目に入る。

眠るイセリナ的首筋が目に入る。

眠るイセリナ的首筋が

眠るイセリナ的首筋が

イセリナ的首筋が

イセリナ的首筋が

イセリナ的首筋が

首筋が

首筋が

首筋が

首筋が

首筋が

首筋が

クビスジガオイシソウダ

「……………なんて夢だ」

インキュバスが人間の処女の娘（本来なら極上の食い物）と添い寝なんてしたからなのか、吸血鬼でもそうそう見ない夢を見てしまった。

もしや、父親の血に吸血鬼の血が混じっていたりするのだろうか？
血液を見て興奮したことはないが、そういう夢を見るなら素質もあるということなのか……………。

流血含むハードプレイの素質なぞ要らんわ。

まったく……………ん？

「あう……………んっ……………／／／」

「……………何をしていますか？」

いやもう動きでわかってはいるが、口をついてついつい聞いてしまうことがあるだろう？

「あっ……………ぐ、ごめんなさいね！すぐに朝ごはん作るから!!」

「え？あっ……………」

言うなり顔を真っ赤にして寝室を飛び出していくイセリナ。

開け放たれた扉と明るい日が差し込む窓、そこそこにふかふかな布団と、粘性のある液体でべっとり濡れた私の白く細い右腕。

「……………はあ……………」

呆れ100%のため息が出たことに自分でも少しどうかと思った。

しかし慣れとは怖いもの、この程度のこと、母には何度もされたから今更どうとも思わん。

ただ、母はしたあとでしっかりと腕を拭いてくれたのだが、イセリナは拭くこともなく行ってしまった。

まあ、最中にバテてしまつてはテンパつてそれどころではないだろうし、大目に見よう。

とりあえず、私は寝ぼけていて、腕のネバネバも寝ぼけていたときに唾液が垂れたと言うことにしておこう。

人間の生娘はメンタルが小さいらしいからな、過度な刺激は厳禁だ。

こんな小さな村の密度の高いコミュニティの中にいる少女の心が病気になるのは私に疑いが向いてしまう。

寝床と食事の恩もある、敬意を持つてここは穏便に納めるように努めよう。

さて、ここでイセリナがいる居間……と行つていいか疑問だが、今はそう呼ぶとして、その部屋に行くかどうかだが。

私は今寝ぼけている、つまり夢の中というわけだ、ならもう一度寝てしっかりと目を覚ます必要があるだろう。

というわけで、二度寝しよう。

朝方は冷えるなあ、体を温めておかないと冷え性になりそうだ。

またあの変な夢を見なければいいんだが……。

第9話

思春期とクエストの話をしよう。

恋多き生命、人間。

恋に生き、愛を求めるロマンチックな生き物。

時に美しく時に残酷なそれらは、どんな場所でも男と女がいれば発
生してしまう厄介なもの。

私自身、愛も恋も不要な生物、淫魔として生まれ落ちたが、やはり
興味は尽きぬもの。

特に、イセリナとリクのは。

商店が看板を掲げ、今日も今日とて人を呼び込もうと声を上げて品
物を売る中。

イセリナも同様に店の売りである下級ポーションや解毒草の限定
値引きを宣伝して客を寄せていく。

値引きされたらしい下級ポーションが飛ぶように売れていくのを
遠目に見ていると、クワを持ったリクという少年までもが下級ポ
ーションを購入しているのが見えた。

下級ポーションの購入者は軒並み剣や斧や槍を持った冒険者と呼
ばれる屈強な男女であったため、その中にクワを持ったヒョロイ男が
いれば嫌でも目立った。

イセリナが言っていた通り、彼女を意識しすぎているあまり、銅貨
数枚を取り出すのにもかなり焦っている様子。

クスクスと笑いながら下級ポーションを渡すイセリナと、赤面し目
を逸らしながらポーションを受け取るリク。

二人のやり取りは見ていて飽きない、リクのあの慌てふためきよう
は酒の肴にでも出来そうなほどだ。

想いを伝え、結ばれてほしいとは思いますが、この面白い光景が見られ
なくなると思うと少し躊躇する。

兎にも角にも、朝から大繁盛のイセリナ道具店であった。

しばらく観察してから、イセリナが食事中に教えてくれた冒険者組

合というものに行ってみることにした。

巨大国家から小さな村まで大小様々な形であるという冒険者組合、そこでは冒険者登録や依頼の登録と引き受け、成功報酬の引き渡しなどが行われる。

王国の城下町にある組合には貴族や教皇などからの依頼も来ると聞くが、この村では精々が山菜や薬草の採取か、害獣の駆除くらいしかない。

それでもやはり大切な収入源、若者から年寄りまでさまざまな装備の冒険者たちが掲示板の前で依頼の取り合いをしていた。

主に、報酬の多い害獣駆除の系統を。

「どけ！金貨2枚の害獣駆除クエストは俺のもんだ！」

「ふざけんな俺のだ！」

「この間に俺はこつちのを……」

「あつ！てめえ！何隠しやがった！」

「べ、別に!?銀貨15枚の害獣駆除クエストなんて知らないぜ!？」

「いったただきい!!」

「二てめえごらああああ!!」

掲示板前はしっちゃかめっちゃかの大賑わい、イセリナ道具店の繁盛ぶりにも劣らない活気があった。

見たところ金貨2枚の害獣駆除の依頼が最高報酬のように見える。

野犬退治で金貨が2枚か……うま味な依頼ではあるが、そんなに金が必要なものなのか？

あるに越したことはないだろうが、こんな辺鄙な場所で稼がんでも良いだろうに……。

それはそれとして、組合の建物に入る。

建物は家屋をそのまま使っているような生活感ある内装で、いくつかの丸テーブルを冒険者たちが囲って寛いでいる。

まだ朝なのに酒を飲んでいる者までいた。

酒臭い冒険者を素通りしてカウンターにいる若い男に話しかける。

「失礼、冒険者登録はここでしょうか？」

「おう！あんさんが登録するのかい？」

「ええ、なにかと便利と聞きましたので」

冒険者組合への登録は、いわば住民票の取得のようなもので、いざという時の身分証明に大いに役立つとイセリナが教えてくれた。

依頼を受けるにしろ受けないにしろ、入っついていて損はないそうだからだ。

「じゃあ、こっちの魔術契約書にサインを」

そう言っ出て出されたのは羊皮紙らしきもので作られた契約書。

文字は読めるため何が書いてあるかは理解できるし、魔術、ということから脱会の難しさが伝わってくる。

契約内容を何度読んでも特にデメリットもないようなので、普通に名前を描く。

書き終わると髪が一瞬光り、文字の部分が宙に浮かんで掻き消えた。

「これで登録のほうは終了だ！」

「これだけですか？」

「これだけさ、あとは向こうの掲示板から受けたいクエストの依頼書をこっちに持ってきたら俺が受理する、クエストが完了したら成功報酬を手渡す、そんなだけ、簡単だろ？」

「へー……実際に初めて見ましたが、意外と簡単なんですな」

「昔はめんどくさい契約書を何枚も描いてたらしいけど、今はこれ一枚でオーケー、あとは、クエストをあんさんが解決して、あんさんが成功報酬を受け取って、俺たち組合がそのおこぼれをもらうってわけ」

なるほど、そうやって運営しているのか。

今のところ考える限りではそれなりに真つ当な組織のようで一安心。

「ありがとうございます、では私はこれで、頑張ってください」

「おう、あんさんもクエスト行くなら気いつけてな！」

カウンターの爽やかなお兄さんの威勢の良い声をバックに、組合の建物から出る。

掲示板では未だ取り合いが続いている……これでは当分近づけな

いだろうな。

諦めて近くの木の近くに腰を下ろす、そよ風と木漏れ日がちょうど良い気温を保ち、待ち時間すら快適にしてくれる。

目的に向かって突き進むだけじゃない、時にはこうやって休み休み行くのも旅の醍醐味。

時間はたつぷりある、焦らずゆっくり行けばいいじゃないか。

魔界とはまた違う癒しのひと時、遠くに聞こえる喧騒を子守唄に微睡みを感じていた。

しばらく経つと、掲示板から波が引くようにサツと人が退いた。

どうやら害獣駆除の依頼は誰かが勝ち取ったようで、一喜一憂する冒険者たちが組合の建物入り口にいた。

掲示板を見やると、薬草の採取から草刈りまで草木に関係する依頼は多様にあつた。

どれもが精々銅貨5枚程度で、まるでファンタジーRPGゲームの最序盤の小遣いクエストを見ているような気分になる。

手持ちの金はまだまだ余裕があり………というより、淫魔である母はそれこそ性を搾り取った後でいくらでも金やら財宝やらをもぎ取れて来れるため、実際には家にはかなりの額の金がある。

持たされた金は1ヶ月は複数の女と豪遊して馬車で帰ってこれるほどには入っているが、母が稼いだ（稼いだとは言っていない）大事な金なのだ。

大金を貸してくれた母のためにも、考えて使っていかなければ。

とはいえ、今のところ使った金額は銀貨が数枚と言ったところ………気にするには、いささか早すぎたかもしれない。

そんなことよりも、今は依頼を見よう。

………ピンとこない依頼ばかりだ。

これは確かに、害獣駆除と比べると報酬というより完全に子供のお小遣いの金額では、時間がかかる採取や草刈りを受けたがらない気持ちかわかる。

生活がかかっている冒険者たちには無駄にできる時間はないのだから。

「私にはありますが……」

そう呟いて、適当に依頼書を取る。

「……………偶然でしょうか」

内容は『薬草と解毒草の採取』、依頼主は、イセリナだった。

「……………ま、これもお勉強のひとつでしよう」

依頼書を持って組合の建物に入り、カウンターの爽やかなお兄さんの前が出る。

「お、さっきの兄さんじゃないか！」

「さっきぶりですね」

「何か聞きたいことでもあるのかい？」

「こちらの依頼を受けたのですが」

「どれどれ……………イセリナちゃんのところか」

そう言つてカウンターのお兄さんは、私が出した依頼書を確認してスタンプを押した。

押されたスタンプの文字が浮かび上がり掻き消える、サインの時と同じ魔術による契約のようだ。

「はい、確認終わり、それじゃあ頑張つて集めてきてね」

これで依頼は受諾完了らしい、なんと便利なことだろうか。

魔術……………使えたらきつと便利なものなのだろう。

あいにく私のMPはクソザコだが……………。

ちなみに、魔法と魔術は読みが違うだけで意味は同じものだ。

人間界に来てからよく聞くが……………：魔術、と呼んだり書いたりする方が人間的には高尚な言い方や読み方なのだろうか？

「ありがとうございます」

「気をつけてな」

さて、依頼も受けたことだし……………ぶらぶら散歩でもしながら、薬草と解毒草を集めるとしよう。

第10話

奴隷の話をしよう。

知つての通り、私は淫魔だ。

種族の特性から争い事は苦手で、姦計や搦め手は得意分野。

主に精神攻撃を主体に『MPをドレイン』（セックス）したり、夢を見せたりして行動を制限して首を刈るか苗床にするのが淫魔の戦闘における条項手段。

大昔から変わらないこの戦法（？）は、人間からすれば分かりやすい弱点が見えているのに、対策ができないといういやらしい強みを持つ。

俗に言う人間の三大欲求なんてもののひとつである性欲をくすぐり起爆させる外道だから当然と言えばまあ、当然である。

猿やゴブリンですらオナニーするといふのだから、人間が性欲に抗えないのは当たり前なのだ。

なぜ、薬草と解毒草を探しにぶらぶら散歩に出かけた私がそんなことを言っているのかというと。

端的に言つて、やつちまつたからである。

歩いているうちに林を抜けて、商人が使つてそうな街道に出たまでは良かった。

道なりに歩いていたら、何やら叫び声が聞こえるではないか、しかも複数の女性の。

興味10割で見に行くと、そこには大勢のエルフが縄で縛られており、今まさに荷馬車に押し込められる3秒前といった様子だった。

いや、すでに数人が押し込められていたか。

狭い荷馬車の中に無理やり数十人のエルフを押し込もうとかなり苦戦し躍起になっている様子が面白く、しばらく見てみようと思った。

その矢先、何人かのエルフが私に気がついたようで、私のほうに向かって這いずりながら猿轡のされた口で「んーっ！」と声にならぬ声

を叫びながらずりずりと這いながらも近づいてきた。

なぜバレたのか？ エルフに見つかった敗因、それはこの白銀に輝くめちやくそ目立つ鎧。

黒にしとけばよかったと、内心想っている。

「誰だてめえ!!」

「覗いてやがったな!? ぶつ殺してやる!」

当然、這いずりエルフを捕まえようとした男に見つかり、殺されそうになる。

それぞれ斧に剣に長めのダガーナイフにボウガン、できれば近寄りたくない武器を持っている男3人に囲まれてしまった。

殺すにしても、剣は汚したくなかったし、貰った投げナイフも消耗品とは言え私にとっては貴重な護身用武器、おいそれと無駄遣いはできない。

何より今は薬草と解毒草の採取の依頼を受けている、ここで人を殺しては処理に手間取り依頼が達成できない。

仕方なく、無効化のために淫魔特有のフェロモンを噴出した。

結果。

「うーん……………どうしましょうね、この状況」

「……………」

襲いかかってきた男たちはフェロモンを真近で当てられ、ヨダレを垂れ流し、ボツキしながら失神。

「おっ♡……………んおっ♡」

「ハア……………ハア……………」

「体が……………熱イ……………」

「ぐっ……………／／／／／／／／」

遠くにいたエルフたちもフェロモンに当てられたようで、一人一人猿轡と拘束を解くたびにそんな甘い声を出している状況だ。

エルフのほとんどが女性であることもあり、男たちの野望であるハーレムはここに存在しているわけだが、正直ちよつと目が怖いのでいつでも斬り伏せられるように柄頭には手を置いている。

拘束に使われていた縄で男たちを馬車の車輪に縛り付け、馬車の屋

根部分を少し解体して焚き火の燃料にする。

極上の燃料である炭を一本放り込んで持ち歩いている鍋を置いて川の水を入れて熱する。

フェロモンに当てられ強制的に発情させられていたエルフたちが正気を取り戻し頭を抱えたのは、それから3分が経った頃だった。

精神の頑強さにおいて人間種を上回るエルフを3分近く行動不能にできる……：……自分のフェロモンについて少し参考になったな。

沸騰して出来た湯を冷やして白湯にし、エルフたち全員に回し飲みさせる。

落ち着いてきたのか、最前列で剣を持っている私からエルフたちを守るように座っていたリーダー格のエルフが話し始めた。

曰く、彼女たちは遠くの森に住んでいた森の民エルフで、村を襲われ拉致された。

馬車の中にあつた隠し檻……：……奴隷商人が荷物をごまかすための工夫らしい……：……の中で揺られること数日、奴隷商人が隙を見せた瞬間を狙って檻の鍵を壊して荷馬車から一斉に飛び出したのだそうだ。一歩間違えば見せしめに数人殺されていてもおかしくなかったが、1人でも逃がすためにそうしたのだそうだ。

偶然とはいえ助けてくれて感謝をしている、何かお礼をしたい、とのこと。

「と、言われましたもね……」

欲しいものはあいにくだが何も無い、あつても自分で手に入れる、だから求めるにしても特別何かあるわけでは無いし……：……。

あつ。

「そう言えば、あなたたちの中に男性はいませんか？」

「お、男のエルフですか？」

ひどく驚いた表情で数秒固まるリーダーエルフ……：……そんなにおかしいことを言っただろうか？

「あ、あの、ぼくが男で……」

「お、お待ちください！彼はまだ成熟しておらず、12にもなっていないのです！私では……：……私ではなりませんか!？」

「彼女でダメなら、私が！」

おずおずと手を挙げた小さな男の子のエルフ、しかし手を挙げた瞬間に女性エルフが波のようになった彼の前に立ちはだかり、突然売り込みをかけてきた。

「いやその……………私は彼がいい……………」

「申し訳ございません！いくら命の恩人といえど、それだけは！それだけは！！」

「お気に召さないようでしたら……………わ、私たち全員で！全員で!!!」

「なのでどうか!!どうか!!!」

ひ、必死すぎる……………。

何がいけないのだろうか？こんな童顔には任せられない的な、親心のようなものだろうか？

うーむ……………しかし、しかしだ。

私はどうしても……………彼が欲しい!!!

「どうしてもダメでしょうか？」

「お願いです……………お願いですから……………」

むむっ……………涙目の土下座でそんなこと言われてしまったら強気に
出れなくなってしまう……………。

いやしかし！

「わかりました、では、私の秘密を一つ明かしますので、それで考えて
もらっても良いでしょうか？」

「か、考えるだけでしたら……………確かに良い返事ができるとは限り
ませんよ?」

「構いませんよ」

言うが早いのか、私は変身を解いた。

髪は白から艶やかな紫色へ、全身を覆う鎧は格納されて下着に近い
ズボンとシャツの薄着姿に、頭からはツノが生え、腰のあたりから
ハート形の尻尾が現れる。

へソ下に淫紋が浮かび上がり、吸って吐く吐息にはフェロモンが混
じり、淫気として大気と混ざり合い、そこにいるだけで動植物を発情
させる危険指定生物。

即ち、淫魔。

「私の秘密、実はインキュバスでした」

「そ、そんな……」

予想とは違い一転して絶望に染まるエルフたち。

あれ？同族だから安心して欲しかったのだが……ああ、そういえばエルフは厳密には魔族ではなく人間種に近い生態だった気が……まあいいか。

「さて、続いて彼を欲しがる理由ですが……」

ポーチから小瓶を取り出して見せる。

「彼の体液が欲しいのです、若い男性エルフの精液は、強力な媚薬の材料として一級品なんです」

「……信用できません」

……ダメか。

「……ですが、私たち全員の前でやること、それをこの子が良いと言うのなら、許可します」

「……ありがとうございます」

しかし弱った、エルフの子供とは言え、精液の意味くらいは……。

「／／／／／」

知っているか……となると、ウンとは言ってくれそうに無いか、厳しいなこれは。

フェロモンを利用して魅了状態にすることもできるが、フェロモンの弱点……というか私の弱点だが、フェロモンが強すぎる弊害でピンポイントで浴びせることは困難だ。

まして密着状態ではどうなってしまうか……。

ここはひとつ、彼に任せよう。

それしか無いが、それが一番可能性が高い。

「えっと……えと……」

「無理しなくていいんですよ？ダメなら他のお願いにしますから」

オドオドする男の子のエルフがいたたまれなくなってしまう、口についてそんな言葉を口走ってしまった。

しかし、予防線を張っておかなければ、私がただシヨタエルフの精液を欲しがる変態にしか……………もう遅いか……………

「ち、ちなみに、ちなみにですよ？」

「はい？」

リーダーエルフが念を押すように何度も繰り返し「ちなみに」と言いながら聞いてきた。

「彼が断ったら……………」

「ああ、そうでした、先に言っておかないとフェアじゃないですしね」

AとBの選択肢でAの内容だけ教えてBは教えないというのは不親切すぎてもはや詐欺だろう。

「断る場合は、薬草と解毒草の採取を手伝って欲しいのです」

「……………へ？……………そ、そんなことで？」

「ええ、それだけで十分ですから……………もちろん、終わったら私も消えませぬので」

森の民と言われるくらい自然と密接な暮らしを営んでいるはず、なら、薬草などの採取程度は毎日やっていることだろう。

媚薬の材料も欲しいが、いつ手に入るかわからない極上の素材をこんな脅迫に近い方法で手に入れても正直……………私が納得できない。

女の姿に変身することもできるが、そんな餌で釣るような、媚びるようなやり方をしてまで欲しくない。

あくまで善意で精液が欲しいのだ。

まあ、どこかに売ってれば買うが。

「あ、う……………じゃあ、薬草のほう……………」

「わかりました、では、まずは皆さんにこれを」

取り出したのは村で買ったパン、普通に作ったものと比べて多少の保存が効くと宣伝されていたものだ。

「十分な量がなくて申し訳ないのですが、今はそれで我慢していただきたい」

喋りながらインキュバスの姿から人間の姿へと変身する。

鎧と盾の装着を確認して、受け取ったパンを食べずにじっと見つめるエルフたちに気がつく。

「?.....あ、別に変なものを入れてませんよ、ついさつき近くの村で買ったばかりのものですから、安心してください」

「.....ありがたくいただきます」

渡したパンに毒物が混じってやいまいか、物凄い怪しまれながら齧るリーダーエルフ。

ちよつとくらい切れてもいいんじゃないか？